RED RIVER

天風蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＥＤ　ＲＩＶＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ８６６９Ｌ

【作者名】
天風蒼

【あらすじ】

未来、日本国内では紛争が勃発していた。
人類ｖｓ『破壊者』と呼ばれるバケモノ。
その紛争に平上龍一と三井広明も巻き込まれていく。
過去、絆、血。
幾つもの運命が巡り巡り……

P1（前書き）

眩しいモノに
手を伸ばしても
届くことはない。
1つ1つしかない大切なモノは
取ろうと思えば
簡単に取れてしまう。
取る時には
己は何とも思っていない。
だが、取ってしまった後に
気付いてしまう。
取ってしまったモノの儚さに。
そして、理解するのだ。
取った己の手の醜さに…

この醜さは……
何時になれば……
消えるのだろう……

P1

地には雪。
空には蒼色。
何も考えずに流される雲は、平和。
しかしその下では、平和とは程遠い銃声が響いていた。
それだけではなく、悲鳴、狂った声、血の飛び散る音。
白い筈の雪は桃色に染まり、そして赤色。

数分経った後、音は消えた。
つかの間の沈黙の後、唸るような声が。

「…人間…如きにっ…わ、我等が…劣るはずは無」

だがその声は、何かを潰す音が発生すると同時に消えた。

「…ごちゃごちゃ喚きやがって…負け犬が。」

血まみれになった男を見下ろしながら、青年は呟いた。
否、もう男の型は残っていない。あるのは紅い血肉のカタマリ。ただのモノ。
長身で黒髪の青年―１０代後半から２０代前半だろうか―は、その”モノ”に背を向け、歩き出した。

「おーい龍一！俺を置いてく気か！？」
「……お前が遅いだけだろ、広明。」

右から走り寄ってきた、こちらも青年―だが、まだ顔には幼さが残

る―が、文句を言う。

「ひっでーなァ。龍一より奥地でちょー頑張ってたってのに。」
「……あっそ。」
「うわ、何でそう俺のコトバを軽く流すかなぁ龍一ちゃんはよー。」
「…聞いててもメリットが無い。」
「そう言うと思った。」
「……眠い。」
「しっかし、俺たちって災難だよなァ。朝っぱらから山ん中行かされるし。つうかよ、普通寒い中に山に行かせるか？」
「…めんどくせぇ……」
「今日の朝メシ何だろ？」
「…寒い……」
「俺的には、やっぱ朝はご飯だと思うのよ。ライス。いや、パンがマズいって言ってるワケじゃなくて、パンも美味い。でもさ、どっちかっつうと昼っぽくねぇか？菓子パンは…あれは、３時のおやつだな。惣菜パン、あれが昼飯。もしくはサンドイッチでもＯＫだな。そんで、晩は丼！親子他人トンカツ木の葉、どれでも良い。それに限るよなぁ…っておい！龍一！！さっきから全っ然かみ合ってねぇし！？」
「……」
「無視すんなぁ！！つうか置いてくなぁ！！！」

背の高い龍一は、構わずスタスタと歩いていく。
同じくらいの背の男が走って追いかける。

これが、彼らにとって平凡な朝。
――――『殺し』から始まる、１日。

P1（後書き）

更新遅いと思いますが頑張ります！
よろしくお願いします。

P2

――今よりずっと未来――
人類は科学を発展させ、より豊かな暮らしを送っていた。
戦も無く、平和な日々。
しかし、当然のように平和は突如崩れる。
町や人の肉体を破壊する、『破壊者（ブリーカー）』の登場。
彼らは、人類にまた戦をもたらした。

その破壊者を取り押さえる為に作られた軍隊『国家特設倒破軍（コッカトクセツトウハグン）』
人間とは異質の力を抑えなければならない為、日本全国から武闘、勉学が出来る者が集められた。特にその中でも実力のあるエリート達には、「ＳＳＳ（トリプルエス）」という階級が与えられる。
先程破壊者狩りをしていた青年――――平上龍一と三井広明も、このＳＳＳにあたる者だ。

＊＊＊＊＊＊

「『ＳＳＳ』所属平上龍一、只今帰還しました。」
「同じく『ＳＳＳ』所属三井広明、帰還いたしましたー♪」
「２名了解。確認を取りますので暫しお待ちを。」

破壊者侵入防止の為、セキュリティー対策は万全なこの施設。
ＩＤカードを受付員に渡し、スキャンを待つ。
このシステムで、まだ一度も破壊者は”侵入”した事が無いらしい。
――――イコール、ここからは人の目を盗んで出れないという事でもある。

「確認完了です。お通り下さい。」

「どーも♪」

自動ドアが開く。
中には無機質且つ地味な灰色の廊下。病院の地下を思い出させる。
しかしそんな事は慣れっこ広明。

「なぁ、食堂！食堂行こうぜ！！ＳＨＯ・ＫＵ・ＤＯ・Ｕ！！！」
「……別に、腹減ってねぇし。」
「あのねぇ龍一クン？飯食わんと動けなくなるよ？ってかエネルギーどっからとってんのさ？ガソリン？バイオエタノール？」
「…俺は車か。」
「しかも腹減ったぁとか思わねぇの？」
「…空腹だろうと仕事に関係ない。それに、朝以外は食ってる。」
「あらあら、マジメ人間ちゃんは～。仕事に命でも捧げてんの？」
「…所詮、俺がやるのは『殺し』だけだ。」
「俺ら１７だぜ？花咲くセブンティーンな俺たち、青春まっさかり♪」
「くだらねぇ。」
「青春イコール女だぜ、女！」
「女がどうした？」
「…あぁ、可哀想な龍一クン。女の子の魅力が判んないなんて。いいか龍一、女の子ってのはまず――」
「俺には関係ねぇしどうでもいい。お先。」「あ、龍一ちゃん！？」

龍一は広明を放っておいて先に行く。

「言っとくと、朝食わんと太るぞー！！」

広明の叫び声。
……どうでもいい。

「あっ！ヒロ♪」
「おっ、美幸ちゃーん♪おっはよー！」
背後から知らん女と広明の上機嫌な声。
…またかよ。
広明は女好きとして、ＳＳＳだけでなく軍の中でも有名だ。
ルックスも悪くないし、性格も明るいからモテる。
…しかし、前の女と名も声も違うようだが？

「ヒロぉ、朝ご飯奢って♪」
「もーう、美幸ちゃんの為ならしょーがないなぁ～。」
「わぁ、嬉しい！さっすが私のヒロねっ♪」

それにしても、朝っぱらから鬱陶しい…。
呑気に、平和に生きている愚民共が。
何かの為に一生懸命戦う筈の破壊者の思いが……。
ここで、のうのうと生きていると何もかもが無駄になっている気がする。
醜い。
平和な自分があまりに醜い。
――――元からして、見てられるモノじゃないのに。
そして、広明（アイツ）もそう思ってる筈。
チャラチャラしてるのは表だけ。
誰も、他人の裏の姿など、判りはしないのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8669l/

RED RIVER

2010年10月9日21時32分発行